

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：33605

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18660

研究課題名（和文）問題診断克服型FDモデルの開発 - 教員の研究指導能力向上を目指して

研究課題名（英文）Developing FD Models to Overcome Problems -Improvement of Faculty Members' Research Supervision Skills

研究代表者

舟島 なをみ（FUNASHIMA, Naomi）

清泉女学院大学・看護学部・教授

研究者番号：00229098

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、看護学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題と教育学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題を質的帰納的に解明した。また、解明した問題に基づき問題診断尺度「看護学研究（修士論文）指導用」を開発し、問題診断チェックリスト「教育学研究（修士論文）指導用」を作成した。さらに、開発した尺度を用いた修士論文指導に携わる看護学系教員のための問題診断克服型FDモデルを考案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、研究指導能力の特徴や経験でなく、これまで明らかにされていなかった教員が直面する「問題」に焦点を当て、看護学と教育学系教員が修士論文の指導上直面する問題を解明したことである。また、このような本研究の成果は、解明した問題に基づき開発した問題診断尺度が、修士論文の指導上直面する問題を明確化し、それによって解決の方向性を見出すために活用でき、教員自身の研究指導能力の向上に寄与し、学生の円滑な研究進捗と修士論文完成に結びつくという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study identified the problems that nursing faculty in Japan encounter while supervising master's theses. It also identified the problems that education faculty in Japan encounter while supervising master's theses. Next, we developed a problem diagnostic scale based on the identified problems for self-assessment of supervising nursing research (master's thesis). Based on the identified problems, a problem diagnosis checklist was created for self-assessment of supervising master's thesis research in education. Furthermore, a problem diagnosis overcoming FD model for nursing faculty involved in master's thesis instruction was devised using the developed scale.

研究分野：看護教育学

キーワード：修士論文指導 問題診断 尺度開発 看護学研究 教育学研究

1. 研究開始当初の背景

現在、人材養成機能をもつ大学院の果たすべき役割は益々、重要となり、それは、新たな社会の創造を牽引し国際社会で活躍するリーダーの養成が急務であることに起因する。これを受け、文部科学省は、大学院教育の質の保証、向上に向け取り組むべき課題として、組織的な教育・研究指導體制の確立とともに、教員の教育・研究指導能力向上につながる組織的な研修体制の充実(文部科学省,2011)を明示した。文献検討の結果、看護学領域を例にとると、「授業に必要な教育能力」向上に資する研究(堤,2015, 亀井,2013 など)は数件存在し、研究指導に困難をきたす教員の現状(石田,2009, 山下,2016)も報告されている。しかし、「研究指導能力」に関わる研究は未着手であることを確認した。また、他学問領域もほぼ同様の状態であった。海外では、「研究指導」に焦点を当てた研究が数件(Booi,H.K.,1997, Elisabeth,S.,2015)存在するが、いずれも研究指導の特徴に着眼しており、教員が直面する指導上の問題、指導能力向上に資する研修プログラムなどに関する研究は存在しなかった。これらは、大学院に就業する教員の研究指導能力向上に資する研究は日本のみならず海外でも未着手もしくは不十分であり、研究指導能力向上を目的とした研修に活用可能な研究成果は極めて乏しいと言わざるを得ない。

本研究は、看護学と教育学の知を結集した知識融合型の研究であり、Dewey,J.による問題解決の原理(安彦他,2002)を根拠とする。看護学系と教育学系研究科を対象とした問題診断尺度2種類、および問題診断克服型FDプログラム編成モデルの開発は、看護学と教育学の研究指導に携わる教員のみならず、多様な学問領域への波及可能性が高く、我が国の重要な課題である国際的に通用する研究成果を産出できる研究者養成に貢献する。それは、研究指導能力向上が分野を問わず我が国の全大学院が取り組むべき重要な課題であり(中央教育審議会,2005)、そのためには現状の正確な診断とそれに基づく系統的なFDが必須であることに起因する。

本研究は、研究指導の中でも、その特徴や経験ではなく、教員が直面する「問題」という前人未踏の領域に焦点を当てる。それは、研究指導に伴う問題の解決が教員の指導能力向上に直結することに起因する。問題診断尺度は、研究指導経験の多少に関わらず、あらゆる教員が指導上直面する問題の明確化と解決の方向性を見出すために活用できる。また、問題診断尺度の診断結果を反映したFDの提供は、教員の研究指導能力向上に資する組織的な研修の実現につながる。これらを通して、教員が研究指導に伴う問題を解決できれば、教員自身の研究指導能力の向上に加え、学生の円滑な研究進行と修士論文の完成に結びつく。さらに、単発的、非系統的なFD、FDの形骸化を回避し、系統的かつ現実適合型のFDの実現に結びつく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、問題診断克服型FDプログラム編成モデル開発に向け、大学院看護学系研究科と教育学系研究科に就業し、研究指導に携わる教員が指導上直面している問題を診断する尺度、看護学研究(修士論文)指導用と教育学研究(修士論文)指導用の2種類の開発、その尺度の測定結果に基づくFDプログラムの編成と有効性の検証である。また、それらを教員の研究指導能力向上を目的とした問題診断克服型FDプログラム編成モデルとして体系化する。その究極的な目的は、教員の研究指導能力向上を目的とした系統的かつ現実適合型FDの実現である。

3. 研究の方法

(1)「問題診断尺度 看護学研究(修士論文)指導用」の開発

大学院看護学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題の全容解明：全国の大学院看護学系研究科に就業し、修士論文指導に携わる教員 709 名に質問紙を配布し、238 部の返送があった。そのうち、直面する問題を問う自由回答式質問に記述のあった 229 部を Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析(舟島, 2018)を用いて質的帰納的に分析し、研究（修士論文）指導上直面する問題の全容を解明した。

の研究成果である教員が研究指導上直面する問題に基づき質問項目を作成し、4 段階リカート型の一次元性尺度として構成した。また、専門家会議、パイロットスタディの実施により尺度の内容の妥当性を検討した。

尺度の質問項目の選定、信頼性と妥当性の検討に向け、作成した尺度を用いた全国調査を実施した。全国 187 の看護学系大学院の研究科長に往復はがきを用いて調査協力を依頼し、承諾の得られた 84 大学院に就業する研究（修士論文）指導に携わる教員 631 名に「問題診断尺度 看護学研究（修士論文）指導用」と特性調査紙を配布した。その結果、231 部を回収でき、そのうち有効回答は 215 部であった。

有効回答 215 部を統計学的に分析し、項目の選定、開発した「問題診断尺度 看護学研究（修士論文）指導用」の信頼性と妥当性の検討を行った。

(2) 「問題診断尺度 教育学研究（修士論文）指導用」の開発

大学院教育学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題の全容解明：修士課程を持つ全国の教育学系研究科 63 校の研究科長又は専攻長に往復はがきを用いて研究協力を依頼し、協力を得られた 13 校に就業し修士論文指導に携わる教員 436 名に質問紙を配布した。72 部の返送があり、そのうち、直面する問題を問う自由回答式質問に記述のあった 63 部を Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析(舟島, 2018)を用いて質的帰納的に分析し、研究（修士論文）指導上直面する問題の全容を解明した。

の分析結果の一般化に向け、質問紙法に加え、半構造化面接法によるデータ収集を行った。24 名から研究への協力が得られ、面接は ZOOM を用いて実施し、時間は 1 名あたり 50 分から 60 分であった。収集したデータを逐語記録とし、修士論文指導上の問題を表す文をすべて抽出し、質的帰納的に分析し、において解明した教員が研究指導上直面する問題と比較した。

計画時には尺度を開発する予定であった。しかし、教育学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題の全容解明におけるデータ収集の状況（回収率）と修士論文を課す教育学系研究科の減少等により尺度開発に必要なデータ数確保不可が予測された。そのため、一般化を確認した教育学系教員が研究（修士論文）指導上直面する問題に基づき、問題を診断できるチェックリスト作成に計画を変更した。

(3) 問題診断克服型 FD プログラム編成モデルの体系化

開発した「問題診断尺度 看護学研究（修士論文）指導用」の使用方法、診断結果の解釈方法、診断結果に基づく問題の類型化等を含むモデルを考案した。それらを看護学系研究科において FD の企画・運営に携わる教員に提示し、開発した尺度及びモデルの有効性、活用可能性等に関する意見を聴取した。また、同様に、今後、一般化を確認した教育学系教員が研究（修士論文）指導上直面する問題に基づき作成したチェックリストの使用方法、診断結果の解釈方法、診断結果に基づく問題の類型化等を含む問題診断克服型 FD プログラム編成モデルを考案し、それらの成果を成文化する。

4 . 研究成果

(1) 大学院看護学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題

有効回答 229 名の自由回答式質問への回答のうち、修士論文指導上直面する問題を具体的に記述した 535 記録単位を分析した。その結果、看護学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題 32 種類が解明できた。解明された看護学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題 32 種類とは、「1. 研究への準備不全学生入学による基礎的能力不足に向けた通常以上の指導量投入」「2. 学生個別の研究阻害要因の排除難航による排除に向けた支援の質量増大」「3. 研究に関わる基礎知識と経験不足による研究各段階での指導難航」「4. 研究課題決定難航による決定に向けた指導長期化」「5. 学生への反復指導の効果不顕による平常心での指導継続不可」「6. 実施した指導の質量に対する適否と要否への懐疑」「7. 学生への理解可能な説明不可による指導への長時間所要」「8. 指導に対する学生の想定外の反応実見による指導の混乱」「9. 学生と教員間の予定不適合による指導日時の確保難航」「10. 異なる専門領域への指導要請受理による指導難航」などであった。

(2) 問題診断尺度 看護学研究（修士論文）指導用

有効回答 215 部の項目分析と質問内容の検討の結果に基づき 20 質問項目を選択した。20 質問項目からなる問題診断尺度 看護学研究（修士論文）指導用 の総得点は、25 点から 67 点の範囲にあり、平均 47.4 点（SD=8.5）であった。尺度の信頼性のうち内的整合性を示すクロンバック 信頼係数は 0.87、再テスト法による 2 回の総得点間の相関係数は、0.87（ $p < 0.0001$ ）であった。尺度の妥当性の構造的側面について、主成分分析の結果、第 1 主成分の寄与率は約 30% であり、全質問項目が第 1 主成分に 0.3 以上の負荷量を示した。また、1 次元性を示す尺度の構造をモデル化し、モデルの適合度を確認した。これらの結果から尺度が概ね 1 次元構造であると判断した。妥当性の外的側面について、研究指導能力と尺度総得点の間に弱い負の相関（相関係数 $r = -0.39$ ）を示した。また、博士を輩出した経験を持つ者の得点は、経験を持たない者の得点より有意に低く（ $t = 2.36, p < 0.05$ ）仮説「博士を輩出した経験を持つ者は、経験を持たない者よりも修士論文指導上の問題に直面する頻度が低い」は支持された。

以上より、完成した 4 段階リカート型の 20 質問項目からなる「問題診断尺度 看護学研究（修士論文）指導用」が高い信頼性を備えているとともに、妥当性の内容的側面、構造的側面、外的側面など複数の証拠を集積し、測定用具として使用可能であることを確認した。

(3) 大学院教育学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題

有効回答 63 名の自由回答式質問への回答のうち、修士論文指導上直面する問題を具体的に記述した 142 記録単位を分析した。その結果、教育学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題 28 種類を解明できた。解明された教育学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題 28 種類とは、「1. 研究に必要な準備不全学生への指導回避不可」「2. 学生個別の研究阻害要因排除に向けた指導難航」「3. 専門性が異なる研究課題への指導不可避による十分な指導可否懸念」「4. 学生の経済状況への配慮による高額な書籍購入推奨躊躇」「5. 学生単独での研究協力者確保不可に伴う確保に向けた支援難航」「6. 留学生の研究指導担当による日本語習得支援難航」「7. 他学部出身学生への研究指導担当による専門領域間の研究調整必須」「8. 学内研究環境不備による不備補足に向けた自己資金投入」「9. 社会人学生の就労時間優先による教員の都合に合わせた指導不可」「10. 研究指導と他業務並進による学生の研究指導時間確保不可」などであった。また、解明した 28 種類と 24 名の半構造化面接データの質的帰納的分析結果を比較し、一般化できる教育学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題が解明できた。

(4) 問題診断チェックリスト 教育学研究（修士論文）指導用

解明した大学院教育学系研究科に就業する教員が研究（修士論文）指導上直面する問題に基づき問題診断チェックリスト 教育学研究（修士論文）指導用 を作成し、その妥当性を確認した。

現在、その結果の公表に向けて準備中である。

(5) 「問題診断尺度 看護学研究(修士論文)指導用」と問題診断克服型FDプログラム編成モデル

看護学系研究科においてFDの企画・運営に携わる教員に、開発した尺度及び問題診断克服型FDプログラム編成モデルを提示し、意見を聴取した。その結果、問題診断尺度 看護学研究(修士論文)指導用と問題診断克服型FDプログラム編成モデルの有効性を確認できた。

<引用文献>

堤千鶴子他(2015): 目白大学大学院看護学研究科「コミュニティ看護学分野」の教育の現状と課題, 目白大学健康科学研究, 8, 43-52.

亀井智子他(2013): 修士課程「チームビルディング力育成合宿セミナー」プログラムに参加した上級実践コース履修者のチームビルディング意識の変化とプログラム評価, 聖路加看護大学紀要, 39, 36-46.

Elisabeth, S. (2015): Rights and responsibilities in research supervision, Nursing and Health Sciences, 17, 195-200.

Booi, H. K. (1997): Style and quality in research supervision: the supervisor dependency factor, Higher Education, 34, 81-103.

石田貞代他(2009): 専門看護師教育課程をもつ看護系大学院の現状と課題に関する調査研究, 山梨県立大学看護学部紀要, 11, 87-94.

山下暢子(2016): 修士論文の研究指導上直面した問題とその克服, 看護教育学研究, 25(2), 24-25.

中央教育審議会(2005): 新時代の大学院教育 - 国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて - .

舟島なをみ(2018): 看護教育学研究, 第3版, 204-236, 医学書院.

文部科学省(2011): 第2次大学院教育振興施策要綱.

安彦忠彦他(2002): 新版現代学校教育大事典 6, 277-278.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中山 登志子、舟島 なをみ	4. 巻 28
2. 論文標題 看護学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題の解明	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉看護学会誌 = Journal of Chiba Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 39 ~ 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13448846-28-2-P39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山 登志子、舟島 なをみ
2. 発表標題 看護学の修士論文指導に携わる教員が直面する問題
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中山 登志子、舟島 なをみ
2. 発表標題 問題診断尺度－看護学研究（修士論文）指導用－の開発
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中山 登志子 (NAKAYAMA Toshiko) (60415560)	千葉大学・大学院看護学研究科・教授 (12501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鹿島 嘉佐音 (KASHIMA Kasane) (80828153)	千葉大学・大学院看護学研究科・技術職員 (12501)	
研究分担者	山下 暢子 (YAMASHITA Nobuko) (30279632)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授 (22304)	
研究分担者	服部 美香 (HATTORI Mika) (60618320)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・准教授 (22304)	
研究分担者	小澤 弘明 (OZAWA Hiroaki) (20211823)	千葉大学・国際教養学部・教授 (12501)	
研究分担者	白川 優治 (SHIRAKAWA Yuji) (50434254)	千葉大学・国際教養学部・准教授 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関